

ソニー教育財団×ぐうたら村 保育実践ゼミナール
やってみよう！ 持続可能な社会につながる保育実践

『いのちを考える』

～たのしむいのち、つながる気持ち～

学校法人ひまわり幼稚園

平井 柊土

『自身について』

ひまわり幼稚園に努めて、4年目、子どもたちとの遊びや活動
の中に保育者としての余裕や保育に対する達成感などを多く感
じる機会があった。



特に今年は子どもたちと野鳥に対して興味を持ち、子どもたち
と様々な経験を行うことができた。日々の保育の中で野鳥を見つけては声を上
げ楽しみ、自分たちで図鑑を作っては、鳥との出会いを記録していった。

このような経験を行い、自分の中で自信がついていった中で、
どこかもやもやした気持ちを抱えるようになった。そのもやもや
が何かを考えたときに、子どもたちの行動や発言から聞こえてく
る状があると感じた。



例えば子どもたちが虫を見つけたときに、保育者として子どもたちによく伝えていたのが「虫たちも生きているんだよ」「しっかりと飼うことができるかな」「死なせてしまうなら逃がしてあげたほうがいいんじゃない」と伝えてきた。

その結果、子どもたちが虫を捕まえたときには、徐々に周りの友だちが「かわいそうだから逃がしてあげようよ」と捕まえることはダメ。逃がしてあげることがよいこと。という考え方が生まれてしまった。

そういった現状や、私自身の悩みを抱えているときにこのゼミナールを見つけ参加することができた。

「ぐうたら村にて」

実際にぐうたら村に向かいたくさんのことを学んだ。また学び以外にも、たくさんの仲間たちとの出会いも私にとって大きなものとなった。

現在の地球環境を改めて考えると、あとのことではない、今のこととして真剣に考え行動していかなければならないことを身をもって感じることもできた。

またそういったことを身近なことから少しずつできるということも学ぶことができた。

森に入り、自然に触れ、食べ物を食べ、学び、語り、そのすべてが保育者と

して、人間として考えていくことができた。

その中で、今のクラスの子どもたちにどんなことができるだろうか考えたときに、子どもたちは野鳥に多く触れてきたため、命に対してきっかけがあるだけで変われるのではと思い、園に戻り命の場所づくりを行っていった。

「実践について」

いのちの場所づくりということでまず取り組んだこととして、子どもたちとバイオネストを作っていくことにした。

豊かな自然がある中で、どうしても子どもたちが自然に触れることができていなかったのは園の中で子どもたちが自由に自然に触れ、命に触れることができる場所なかったからであると感じた。

子どもたちとはまず木の枝や、つるなどネストに使いそうなものをたくさん集めに行った。子どもたちもこういったものを



作りたいんだけどと伝えると、ノリノリで集めに行く姿が見られた。実際に子

どもたちはこれは使える？といったことを聞いてきたりあるいはもども同士で話していたりと楽しんで集めていた。



集め終わると園庭に命の場所づくりを開始した。木の枝を杭に

したりするところは保育者が行い、子どもたちは木の枝を巻きつけていくとこ

ろを行っていった。

枠が完成すると、子どもたちはここに生き物を呼びたいということになり、どんな場所が生き物が来てくれるかを考えていった。

土をやわらかくしたり、葉っぱを植えてみたりする中で、一人の子がミン
トに水をあげたときに、葉っぱがニコニコしているね。と声を出していた。

私自身もこの発言を聞いて、子どもたちが葉っぱではあるが、人と同じように感情があるように子どもがとらえたのかなとも思った。この声は私がこの実践を行う中で、本当に子どもたちに感じてほしかった気持ちであり、実践の意味を感じさせてくれる声となった。

その後は、まだまだ虫も出ていなかった中で、卒園まじかにはアリが出始めており子どもたちも、もっとたくさんの虫も来てくれるかなと声が出た。

今の子どもたちにはここまでとなってしまったが、少しではあるが命の考え方や、かかわり方についての考えが変化したのではないかと考えた。



「まとめ」

今回の実践では、この命の場所をこの子たちで終わるのではなく、幼稚園で生活していく次の子どもたちにも引き継いでいくことができる場所だと考え

ている。実際に作っているときには、年中児の子どもも参加していて来年度に
つながる場所になっていると考えている。

今後は様々な動植物をこの命の場所で子どもたちが関わることができるよ
うに保育者も一緒になりこの場所を楽しみながら、子どもたちと命について考
え命のつながりや命そのものを楽しんでいきたい。